

## 比較文化学習を通しての学習者の変容に関する研究

— 情意面を中心に —

広島県立賀茂北高等学校 上西幸治

### 1. はじめに

文部省の学習指導要領の内容を見ると大きく2つの柱がある。

- 1) コミュニケーション能力の育成を目指す
- 2) 言語・文化に対する関心を高め、国際理解を深める

この柱の両輪がうまくかみ合って英語教育を円滑に促すと考える。学習者の現状を見ると、英語の学習からかなり逸脱しているものが増加している現状がある(広島大学英语教育研究会 1989)。その現状の中で、文部省関係者ばかりでなく、現場に携わる英語教師が何をすべきなのかをもっと真剣に考えていかななくてはならない。

学習者の英語離れがある中、現場の教師の取り組みは様々な報告として取り上げられている。中でも、本研究に関する異文化理解(文化学習)に関する実践報告も多く出されている。しかし、その報告・研究が単発なものとして終わり、どの程度学習者に影響を及ぼしているのか、図りかねる現状がある。つまり、文化学習に関して、印象的評価の発表や報告はあるものの、その裏付けとなる実証的な研究は、ほとんど発表されていないのが真実の所であろう。文化学習は確かに有効であることは多くの研究者・教育者によって述べられている。それにもかかわらず、どの程度有効であるのか、どのような学習者の意識の変容が生じているのかを研究するまでに至っていないと考えられる。そこで、本研究では文化学習の実践を継続的に行うことで、学習者にどのような情意面の変容が生じるのかについて調査・研究を行った。

### 2. 文化学習の意義とその実践

文化教授(異文化理解)研究者及び教育者による研究・実践の意義を大きく大別すると、以下のようになると考える(上西 1996)。

- 1) ATTITUDINAL ASPECT (学習志向的側面)
- 2) COMMUNI-CULTURAL ASPECT (意志疎通のための文化的側面)
- 3) HUMAN- EDUCATIONAL ASPECT (人間教育的側面)

本研究では、その中でもATTITUDINAL ASPECT(学習志向的側面)に焦点を当てている。文化学習(教授)の位置づけとしては初歩的な立場であるが、英語学習者の現状を見ると重要な位置を占めると考える。つまり、文化学習を通して学習者が喪失している英語への興味・関心を沸き立たせ、英語に目を向けさせていく一つの方策として考えられるからである(北尾 1979, 服部 1987, 松本 1987)。

具体的実践も幾多報告されている。学生の学習意欲を高めるために、70年代においては、文学作品・視聴覚機器を導入したLewald(1974)、特別なシラバスを含むコースの中で学生の学習意識向上の実践をしたBourque & Chehy(1976)、多方面の教授陣の協力・工夫によって支援された学際的なコース設置に取り組み、外国語学習への姿勢の変化を試み成功したKeller & Ferguson(1976)、文化教授のコースを通してフランス語学習の動機付けを行ったKlayman(1976)などがある。最近の実践例では、絵本を導入することで視覚的な側面から学習者の興味づけ及びリーディングの理解力を高めていったLipp(1989)、新聞というauthentic materialの中の様々な情報(スポーツ・写真・番組等)を利用して初級学習者の動機付けや英語力向上を試みたTopia(1993)、文学作品の短編を導入し、学習者の学習意欲と英文理解力を高めたZyngier(1988)などがある。

日本では、英語教育の現状を踏まえ、様々な取り組みが行われてきたが、報告されたものを幾つか紹介す

る。英字新聞の切り抜きを使って生徒の関心を高めた隈部・市塚(1982)、民話を動機付けとして使った実践の三宅(1976)、生徒の歌への興味・関心に着目し、歌の導入により英語への関心及び英語力を高める実践を行った坂本(1993)、自主教材(英字新聞・文学・音声教材等)を使って英語学習への動機付けを促した工藤(1994)、マンガを使って異文化に対する見方の幅をつけさせる授業を展開した荻野(1996)、物語感覚のソフトの使用によって、英語学習に興味を持たせた有賀(1996)などがある。

特に、新聞の切り抜きによる実践を行った隈部・市塚は、「新聞にはマンガ・広告・絵(写真)・事件など内容豊富なので学習効果を高めるのに効果がある」と述べている。また、工藤も新聞の切り抜きをマンガ・写真・広告・一般記事等、大いに活用した実践を行っている。上記の実践でも推察できるように、新聞は確かに内容豊富であるだけに、生徒の実状に応じてその使い方を考えれば、格好の異文化教材と言える。そのような題材を導入することで、学習者の外国語学習の意欲や興味・関心の高まりが促進されていることが示されている。ここにも文化学習の学習意向的側面の意義を十分に示していると考えられる。

様々な実践報告があるが、この視点は英語教育者(教師)ばかりでなく学習者の立場に立った、英語を教授する上での意義深い側面をも持っていると言える。現実の教育現場を見ると、1つのクラスに英語能力の差が大きい生徒たち、英語に対しての興味・関心の度合いの差が広い生徒たちなど、様々な生徒たちが混在していると言っても過言ではない。生徒の英語学習の目的意識もあまり明確ではなく、とりわけ高校現場ではやる気を失っている生徒や英語嫌いの生徒がかなりの人数を占めている(広島大学英語教育研究会1989)。ただその様な現実の中で、教師は言語教育において、教授法等を模索しつつも、かなり一方的に英語を押しつけている事実があるのではなからうか。そのことを考慮しつつ、教師の側よりむしろ学習者の視点に立って、文化学習導入は英語に対する興味・関心を沸き立たせるために、大いに効果が上がることを期待できると考える。

### 3.1 研究目的

本研究において、上記の学習志向的側面(Attitudinal Aspect)というのは、学習者が言語学習により興味・関心を抱き、学習の楽しさを理解し、文化学習を通じて言語の勉強に取り組んでいくことを容易にし、学習効果を高めていく上で意味があるものだと考える。それ故、学習志向的側面は、いわゆる外国語教育の初歩的段階(Rudimentary Stage)あるいは、再学習段階(Re-learning Stage)への導入と考えるべきものである。

前章で論述してきたように、過去の先行研究において文化学習が外国語学習意識の向上に有効であることが提唱されている。しかしながら、授業実践を通しての文化学習に関わる実証的なデータを見るまでには至っていない。その点を重視し今回の研究に至っている。その事実を踏まえながら、実際に3カ月間、文化学習を継続的にクラスに導入し、文化学習の事前調査(4月)と事後調査(7月)との比較をすることによって、彼等の英語学習に対する意識が情意面においてどう変わるかを探求・把握することが本研究の主たる目的となる。

### 3.2 研究方法

異文化教材を扱う場合には、2つの視点があると言われている。1つは、題材(Topics)に関わるもの(外在的文化教材)を扱う場合であり、もう1つは、言語材料に関わるもの(内在的文化教材)を扱う場合である(伊藤1992、除川1992、森住1984)。本研究では、文化学習に関する題材を中心に導入を試みた。

具体的実施方法に関しては以下の通りである。

- 1) 実施期間 1996年4月～7月
- 2) 被験者 広島県の県立高校1年生(男13名 女20名)
- 3) 実施方法 事前調査(4月)と事後調査(7月)との比較
- 4) 調査項目 主要な項目は次章を参照
- 5) 指導題材 題材に関しては、日常生活(習慣)、コミュニケーション、信念・価値観の各分野から学習者を引きつけやすいと考えられる文化的題材を選定(具体的には以下の通り)

ジェスチャー・ハウスツアー・母の日・デートの習慣・ラッシュアワー（身体接触）・写真・日本人旅行者・パーティー・動物の鳴き声・色彩感覚（虹）・アメリカンドリーム・トイレ・マンガ（個人的質問）ほめ言葉・謝罪（I'm sorry）・先輩、後輩・お土産（toys）・給食

その題材を英語授業の中に位置づける方法としては、大きく2つの方法がある。一つは授業1時間の中で10分ないし15分くらいの時間を「投げ入れ」として、その学習に当てる方法で、もう一つは、1時間の授業を全てその文化学習を目的とした授業を展開するものである（和田1996）。教科書は教科書として扱う必要があるが故、私の意図する文化教材を導入するために、前者の方法（授業の中で時間を割く）をとった。但し、単発的な「投げ入れ」教材としてではなく、毎時間文化学習を試行するという継続的な文化教材の導入をする方法を採用した。その展開方法は、Thinking, Interaction, and Understanding というプロセスを踏んだ。継続的な実践によって、学習者はよりその影響を受けやすく、彼等の英語学習に対する意識がどのように変容をしていくかを考察することがより可能となると考えたからである。つまり、4月に事前調査を行い、4月から7月まで文化学習の実践を行い、さらに7月に再び同じアンケート調査を実施した。その両者を比較することにより学習者の英語学習に対する意識がどのように変化したかを検証した。

### 3.3 研究結果・考察

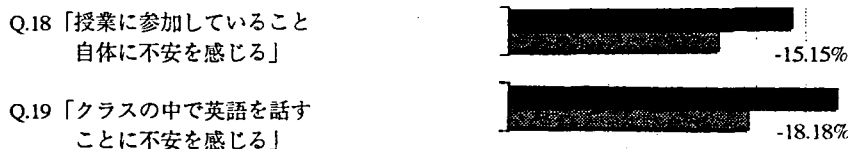
文化的題材（主に異文化的題材）を導入して実施した授業実践に関して、事前調査と事後調査を実施し、両者を比較することによって学習者の意識の変容を分析し、考察した。

分析方法としては、カイ二乗検定を用いて事前調査と事後調査の比較を行った。学習者の不安に関する項目(Q.19)に関しては有意差が出た( $P < 0.05$ )ものの、それ以外の項目に関しては有意差は出なかった。それを念頭に置いて、意識の変容に関して学習者の人数の割合を比較しながら、以下の項目に関してその考察を行っていた。

- (1) 授業参加とスピーキングの情意面
- (2) 英語学習への関心の高揚
- (3) 異文化学習志向及びその影響
- (4) 受容技能（リスニング、リーディング）への関心の高まり

#### (1) 授業参加とスピーキングの情意面

Q.18「授業に参加していること自体に不安を感じるか」の質問で15.15%生徒の割合が減少、また、Q.19「クラスの中で英語を話すことに不安を感じるか」の質問では、18.18%生徒が減少している。このことを踏まえれば、クラスの授業に参加すること自体への不安は少なくなっていることが窺える。一種のwarm-up activity 的位置づけとしての文化学習をわりと気楽に生徒が受け入れ、楽しんでくれている傾向を推察できる。生徒の英語授業への不安を少しでも解消する1つの要因として考えられるが故、喜ばしい結果とも言える。学習者の心の不安が減少することで、英語への好意・意欲の高まり、あるいは英語力育成などへの学習効果の高まりも期待できると考える。特に、話す力の不安に関して事前と事後で生徒の意識に有意差があったのは驚くべきことであった。このことは生徒とのコミュニケーションを大切にしながらも、無理強いせず気楽に授業に参加させ、異文化学習を促進させることを目的にしたが故に功を奏した1つの結果といえるかもしれない。



(2) 英語(学習)への関心の高揚

Q.13「全体的に見て、英語が好きだ」生徒が9%増加する。Q.22「英語を使う仕事に就きたい」生徒も9%増えている。英語への関心を高め、その方向を志す生徒が増加していることは、文化学習の1つの好ましい結果と言える。本来的に高等学校の状況において、英語嫌いが増加していることが調査で明らかになっているし(広島大学英語教育研究会 1989)、上西(1996)の調査においても、英語嫌いの生徒が3分の1以上存在している。そのことを踏まえるなら、英語に対していかに学習者を志向させていくかは教師の課せられた基本的な問題といえる。3カ月という短期間の実践に基づいたデータではあるが、その結果は明らかに、文化学習の導入によって学習者の否定的意識が僅かではあるにしても、英語学習志向へ傾いていったことを示すものと言える。

Q.13「全体的に見て、英語が好きだ」



Q.22「英語を使う仕事に就きたい」



(3) 異文化学習志向及びその影響

Q.33「外国人と友人になりたい」は18.18%増加し、Q.27「外国の地理・歴史を学びたい」Q.28「英語を話す人々の考え方・言葉のやりとりの違いを学びたい」がともに6%増加した。僅かながらではあるが、全体的に外国人(英米人)の考え方、言葉等の違い等を学習したがっていることは、文化学習導入によって彼等の外国の文化に対する意識の高揚を促進し、内容面において比較文化的視点を中心に導入したことによって英語を話す人々の考え方、言葉のやりとりの違い、いわゆるIntercultural Communicationに関わる分野の学習意識が高揚したと考えられる。

しかも、Q.39「外国の生活習慣を学ぶことで英語学習に意欲的になれると思いますか」、Q.44「外国事情などのビデオ視聴によって英語学習に意欲的になれると思いますか」という質問は、ともに肯定的回答は全体の生徒の9%が増加した。外国の生活習慣に関する学習をすることが英語学習に意欲的になれるという意識が確実に増加している。このことは文化学習の意義深さ、つまり文化学習の意義の第1の側面、学習志向的側面(Attitudinal Aspect)の意義が生徒の中にかなり浸透した結果であると言える。

Q.33「外国人と友人になりたい」



Q.27「外国の地理・歴史を学びたい」



Q.28「英語を話す人々の考え方・言葉のやりとりの違いを学びたい」



Q.39「外国の生活習慣を学ぶことで英語学習に意欲的になれると思う」



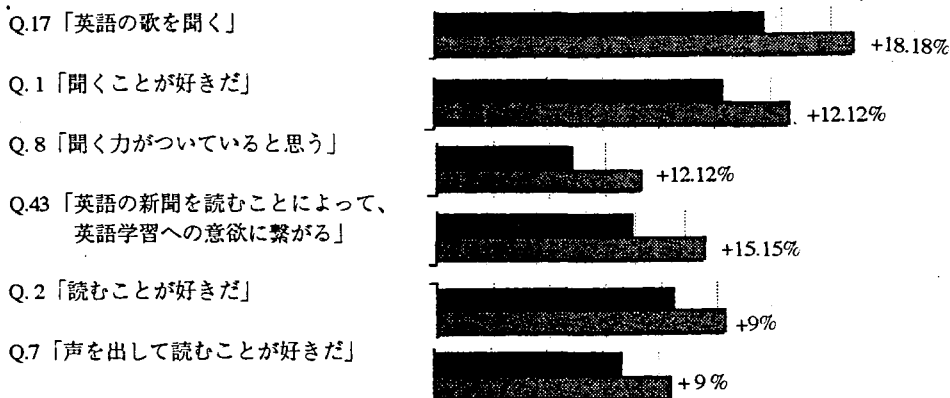
Q.44「外国事情などのビデオ視聴によって英語学習に意欲的になれると思う」



(4) 受容技能 (リスニング、リーディング) への関心の高まり

Q.17「英語の歌を聞きますか」(+18.18%)、Q.1「聞くことが好きですか」(+12.12%)、Q.8「聞く力がついていると思いますか」(+12.12%)のように、全体に関する増加が見られた。リスニングに関する事項において10~20%の生徒の増加があった。文化学習の中で(1)Thinking (2)Interaction (3)Understanding というプロセスを行い、生徒とのコミュニケーションを大切にすることによって、英語を通して文化学習を学ぶことの効果が多少なりとも具現されたと考えられる。

リーディング面に関しても、Q.43「英語の新聞を読むことによって、英語学習への意欲に繋がる」(+15.15%)、読むことで理解が深まれば、より英語学習へ積極的になっていけると解釈しうる。Q.2「読むことが好き」(+9%)、Q.7「声を出して読むことが好き」(+9%)のように、学習者は関心の高まりを示している。



#### 4. 結論

本研究においては、文化学習を継続的に授業に導入したことで、学習者の意識の変容が現れるか否かを実証的に研究することを試みた。およそ3カ月の授業実践であるが故、十分な有意差は出ていないが、学習者の情意面の変容は表出している。

中でも、文化学習の実践によって以下のことについて変容が認められた。

- (1) 英語 (学習) への関心が高まり、英語が好きになる生徒が増えた。
- (2) 英語授業の参加に不安を感じる学習者が減少した。
- (3) 異文化学習志向の学習者が増加した。
- (4) 3技能 (リスニング、スピーキング、リーディング) への学習意欲・関心をもつ学習者が増加した。

全体的に見て、文化学習実践が短期間ではあり、授業の中で約15分の導入であるので、そのことだけが学習者の変容に影響しているとは言いがたい側面がある。しかし、教科書使用の授業実践も影響力はあるにしても、今回の文化学習が生徒に与えたインパクトは大きいものがあったと感じる (上西 1996)。更に、7月中旬に実施した意識調査 (Appendix 2) においては、特に英語学習に対する関心を示す生徒、異文化学習に積極的な生徒が多かった。このことは実施した文化学習導入の授業が生徒の意識変容にプラスの影響を与えていることを明示していると考えられる。つまり、導入した結果は学習者の英語学習に肯定的な影響を与え、今後の学習にも好ましい結果をもたらしたと言える。今後は、より長期的な実践をすることによって、好意的意識変容が更に増加するのかどうかの検証や学習者の情意面ばかりでなく実際の行動面及び英語能力の側面に関する調査・研究も行っていきたい。

## REFERENCES

- 上西幸治 1996. 「文化学習導入による生徒の意識変容に関する研究」全国英語教育学会自由研究発表  
 北尾謙治 1979. 「米国の外国語教育における文化教授 <その1>」【中部地区英語教育学会紀要】9、10-25  
 服部孝彦 1987. 「高校での異文化理解の指導」【現代英語教育】9月号 12-14  
 広島大学英語教育研究会 1989. 「英語の意識調査(3)」【英語教育研究】32、71-126  
 深澤清治 1994. 「比較文化の視点から見た教材と指導法」【中国地区英語教育学会研究紀要】23、281-288  
 松本青也 1987. 「異文化理解の必要性」【現代英語教育】9月号 15-17  
 和田 稔 1996. 「投げ込みアクティビティーの基本的な考え方、活用の仕方」【英語教育事典】38-39 アルク  
 Keller, H. H. & Ferguson, J. W. 1976. A Cultural Introduction to Foreign Languages. *Foreign Language Annals*, 9, 1, 50-55.  
 Klayman, N. E. 1976. Teaching Culture in English to Motivate Foreign Language Study. *Foreign Language Annals*, 9, 2, 289-293.  
 Levine, D. R., Baxter, J. & McNulty, P. 1987. *The Culture Puzzle*. Prentice-Hall, Inc.  
 Lewald, H. E. 1974. Theory and Practice in Culture Teaching on the Second-Year Level in French and Spanish. *Foreign Language Annals*, 7, 6, 660-667.  
 Tamalin, B. & Stempleski, S. 1993. *Cultural Awareness*. Oxford University Press.  
 Wallach, M. K. 1973. Cross-Cultural Education and Motivational Aspects of Foreign Language Study. *Foreign Language Annals*, 6, 4, 465-468.

### Appendix 1

### ＜英語意識調査 (Part 2)＞ 1年 名前 ( )

4月から文化の違いについて授業の最初に話・言葉のやりとりを授業の最初でしてきました。その学習(マンガ、ジェスチャー、写真、習慣の違いなど)をしたことによって、あなた自身のなかで英語(学習)に対する気持ちの変化があったと思いますか。以下の質問に関して、5(とてもそうだ/そう思う)、4(そうだ/思う)、3(どちらでもない)、2(そうではない/思わない)・1(全くそうでない/思わない)の中で当てはまる番号に○をつけて教えてください。

- 1 英語の予習を自ら進んでするようになった。      2 英語の授業(先生の話など)に集中して聞くようになった。
- 3 英語に対して興味をもてるようになった。      4 英語は役に立つと思うようになった。
- 5 英語(学習)は人と人とのコミュニケーションのための学習だと思うようになった。
- 6 英語は重要だと思うようになった。      7 未知の単語の単語の意味は辞書で調べるようになった。
- 8 英語の学習の中での文化の学習は重要だと思うようになった。
- 9 全体的に見てあなたは英語に対して以前よりも興味・関心を抱くようになった。
- 10 英語学習は意味があると思うようになった。

